説教要旨「暗闇に射す希望の光」

イザヤ書　５１章４～１１節

テサロニケの信徒への手紙Ⅱ　５章１～１０節

イエス・キリストの降誕祭であるクリスマス前の４週の日曜日を、アドヴェントと呼びます。けれどもアドヴェントは、クリスマスを待ちわびるだけのものではありません。十字架上で死に、そして復活されたイエス様は、弟子たちの目の前で天に昇られました。そのイエス様が、世の終わりの時には再びこの地上に到来し、最後の審判が行われるといいます。この地上にイエス様が再び来られるその日を、クリスマスに救い主が誕生された出来事に重ね合わせて待ち望む期間、それがアドヴェントです。

「終末」だとか「最後の審判」と聞くと、なんだか恐ろしくなってしまいます。それこそ閻魔様の前に引き立てられていって、『おまえは生前こんな悪いことをしてきたから地獄行きだ』などと宣告される。…そんなイメージで、この「最後の審判」を恐れてはいないでしょうか。

誰よりも自分のしてきたことは自分自身が知っています。誰かに嫉妬して意地悪したことだったり、困っている人を見て見ぬふりしたことだったり…。こんなに罪深いわたしが、地獄に落とされないわけがない。そう考えると、「最後の審判」のために来られるというイエス様には、もうずっとこないでほしいとさえ思うのです。

しかしもともと「終末」は、地獄に落とされたらどうしようなどという恐怖の対象ではなく、救いが成就するとき、暗闇の中に輝く希望の光として、待ち望まれました。むしろ希望のとき、暗い現実に立ち尽くすわたしたちを励ます、希望の光なのです。

パウロはその根拠をこのように語っています。

「主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。」（Ⅰテサ 5:10）

わたしたちが目覚めていようが、眠っていようが関係なく、イエス様はわたしたちと共に生きようとして下さり、そのために十字架にかかって死んで下さったのです。その日には、「神は我々と共におられる。」このインマヌエルの約束が成就するのです。

（２０２１・１１・２８　説教者：稲垣真実）